

千正康裕著『ブラック霞が関』新潮新書（2020年）

行政改革・国家公務員制度担当大臣が、若手官僚の自己都合退職の増加をブログで取り上げ、その後の記者会見で、長時間労働とやりがいの欠如が課題であると指摘した。時期を同じくして、霞が関の労働実態について、元官僚が書いた本書が発刊された。

著者は、18年半勤めた厚生労働省を昨年（2019年）、44歳で退官した元官僚である。官僚時代には、社会保障や労働政策の分野で政策立案にかかわっていた。また、業務外でもNPOなどの現場に足を運んだり、政策などに関する実名での情報発信を行ったりもしていた。

現在の霞が関は、仕事が増え続ける一方で人員は減っており、社会の役に立つ政策を作っているという実感を官僚が持てず、若手の離職や採用難が深刻化していくと、「政策をつくる」という機能が存続できるのかということに著者は危機感を抱いている。そして、今の霞が関に必要なのは、非効率なやり方を変えて、官僚が働いている時間の多くを、国民のための政策の検討や執行に費やせる環境づくりだという。

第1章「ブラック企業も真っ青な霞が関の実態」は、霞が関の労働実態について書かれている。著者が入省した頃も若手は忙しかったが、組織全体には余裕があり、先輩たちとのコミュニケーションのなかで、仕事のやり方や作業の意義などを教わったり、国会待機の待ち時間に政策談議がされることもあった。一方、今は求められる政策の検討スピードが上がり、1つの仕事にかけられる時間が短くなって労働密度が高まり、仕事以外に雑談をする余裕もない。また、若手だけでなく幹部も忙しくなったという。著者が示した忙しい部署での若手官僚の1日のスケジュール例をみると、20年前の場合は9：30の報道確認に始まって退庁が22：30であるのに対し、今は7：00に自宅で大臣用の応答メモ作成から始まり退庁は27：20となっている。

また、最も負担の大きい業務である国会対応についてもこの章で触れられている。国会質問の質問通告（質問内容を議員が省庁に事前に伝えること）の期限がほとんど守られていないことや、質問主意書の多さ・期限の短さが業務を圧迫しているという。

第2章「石を投げれば長期休職者に当たる」では、過酷な労働環境における休職者に焦点をあてている。昔は、長期休職は例外的なケースだったが、今はタフな職員も休職に追い込まれており、著者自身が体調を崩して休職した経験についても触れられている。

第3章「そもそも官僚はなぜ必要なのか」では、政策をつくるという官僚の仕事や、民間と公務の本質的な違いについて説明されている。また、国民は官僚の雇い主のような立場でもあり、業務が遂行できる体制になっているか、仕事のやり方は効率的かなど、国民が目を見せたいことが大切だと著者は指摘する。

第6章、第7章では、霞が関と永田町への提言として、ICT等の技術を利用した業務効率化、ルールや手続きの見直し、民間の知見の取り入れ、業務の外注などがあげられている。

霞が関の官僚が疲弊して仕事の質が落ちれば、その影響はいずれ国民に回ってくる。現在、各省庁職員の在庁時間に関する実態調査も進められている。官僚の仕事や労働環境にも目を向け、声を上げていかなければならない。（浅香 徹）